

---

# 仮面の騎士（ハイド・ナイト）

バカ夜空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面の騎士  
ハイド・ナイト

### 【Zコード】

Z3620Y

### 【作者名】

バカ夜空

### 【あらすじ】

銃、剣、刀、その他もろもろの武器を習う文武学校。

そこに通う表の主人公は最低ランクのDランクだが、裏では銃の整備士（スミツク）をやっていて仕事は少ないがそれなりの成果を出していた。主人公と学校生徒達などのバトル？ ラブ？ コメディ？ ものです！

## 『#話（レジン）』

昨年の事件の一つにこの一つの話がある。

一つ、そこは一般市民が普段はほとんど訪れない小さな村である。

一つ、野獣<sup>モンスター</sup>が出やすい非常に危険な地域である。

これらを充たしていた村で、野獣<sup>モンスター</sup>に捕らえられた中学生の女の子を助けようと村の人たちが戦っていると、ビルからともなく現れた仮面をつけた騎士が参戦してくれたという話だ。

それを見たものは言つた。

それは野獸にさえ恐れず立ち向かう勇氣があつた。

それと一緒に戦つたものは言つた。

それは剣を使い銃をも使い素手でも戦える武の天才だと。

それに助けられたものは言つた。

それは物語に出てくる騎士様のように強くかつっこい。

子供に読み聞かせる絵本にもされた『仮面の騎士<sup>ハイド・ナイト</sup>』と呼ばれる謎の仮面男のお話だ。

その正体は今もまだ謎であるが……。

「…………や…………」

「…………きなさい…………そら」

誰かが俺の名前を呼んでる。眠たいんだ、静かにしてくれよ。

「起きなさいよそら！」

つむれこ声でたたき起こされた場所。そこにはいつもベッドの上だった。

窓から明るい光が入ってきていて、起きたばかりの俺の目にはその光は拷問のように辛い。

いつもの女の子が起こしてくれたようだが、簡単には目を開けられないでそのまま見ることができるない。

まあ、見えなくても声でわかるんだけど。

「お休み、夏帆」

起こしてくれた女の子 筒倉夏帆さとうくら かほにおはようではなくお休みと告げる。

夏帆とは幼稚園が一緒で親の中も良かつたのでいつも一緒に遊んでいた。世間一般で幼馴染みと言つやつだ。

普通幼馴染みでも朝起こしに来るなんて漫画のヒロインくらいだろい。

しかし俺の両親が事故で亡くなつていて、家に誰もいない。

今は妹と一人暮らしをしてるが俺も妹も一度寝ると田舎まし時計程度では起きない。

それでいつも夏帆に起こしに来てもらつてて。でも今日は眠いから起こさないでほしかった。

「お休みなさい。……つて違うでしょー、起きなさいよーー！」

一人でノリつっこみしてるなつて思つていたら、腹を割るような勢いでかかと落としをしてきた。確かこれは俺の母さん直伝の技だ。流石に俺にはしなかつたけど母さんが父さんによくやつてたのを覚えてる。……よく耐えてたな、父さん。これ結構痛いぞ。

「起きるから殺さないでくれ。マジで死にそう

痛む腹を抑えながらゆづくつと立ち上がる。あー、鳩尾に入つてかなり痛い。

「あんたはいちいち大袈裟なのよ」

腹にかかると落とした張本人が逆ギレしてきた。そんなことしなかつたら大袈裟なリアクションも知らないのに。

「自分の朝ごはん作りすぎて余っちゃったから、机の上に置いといたわよ。……ち、違うわよ！ ホントに作りすぎただけなんだから！」

何故か最後はキレ気味で言つてきた。俺は何も言つてないのになんで怒つてるんだろう？ 女の子は不思議だな。

まあ、ここまでちよつと仲良し（？）な幼馴染みの会話に見えるだろ？ ここまで世間一般なんだけど……、

とそこでドアに手をかけた夏帆が振り返つて言つた。

「あっ、そうだ。この前 ワルサーP38 を現地購入してきて、今は倉庫に入つてあるから後で整備しといてくれる？」

そう、何を隠そう俺は銃の整備士で文武学校の戦闘生だ。  
銃の整備士は父さんがそうだったから継いだけ。まあ、多少技術がいいだけだ。

戦闘生は、その名の通り戦う生徒で色々な科目があり、俺はその中の銃刀科に所属している。

ワルサーP38 はドイツの自動式拳銃で、古いからあまり出回らないが現地購入するほどの品でもないんだけど……まあ、整備程度ならすぐ終わるし学校に行く前にパパッとやってしまおう。

そうして俺がベッドから立ち上がった瞬間　ぐうううう。

「……まずは朝ごはんを食べよつ」

お腹がSOSを出してきたので朝食をとるためにドアを開けてリビングへ向かった。

## 『整備（メンテナンス）』

早々に食べ終わった俺は先ほど頼まれた銃の整備<sup>メンテナンス</sup>をしていたんだが、

「かなり古いな……」

銃床<sup>レシーバー</sup>にはひびが入っているし、引金<sup>トリガー</sup>も欠けてるから取り替えないと使いにくいだろう。

それらのことからこれが何十年も使い込まれたと見える。

それにしても……夏帆はどこでこれを手に入れたんだろう？

現地購入つて言ってたから新品じゃないことはわかつてたけど、ここまで古いものはそろそろどこにでも置いてあるとは思えない。

「後で聞けばいいか

頭を切り替えて銃床<sup>レシーバー</sup>と引金<sup>トリガー</sup>を直していると、俺がいるガレージのよつな倉庫の入り口から、夏帆に「学校に行くわよ」と声をかけられた。

「もうそんな時間か

俺は近くにあつた時計を見た。その針は確かに『8』を指している。

授業は八時四十分からで学校までは三十分かかる。そろそろ出た方がいいだろう。

「うん、そろそろ行こつか

「これもちゃんと持つて行きなさいよ

夏帆の言葉と一緒に投げられたのは俺が愛用している刀の 蒼桜

と銃の グランパレット<sup>ブラックスマス</sup>だ。

蒼桜は俺が小さい頃に刀鍛冶<sup>ミツ</sup>だった母さんが俺に造ってくれた唯一の刀。名前は、造ったとき刀に反射した桜が蒼く見えたかららしい。

ほとんど銃を使うから刀はあまり使わないんだけどね。

ちなみに母さんは病弱で、親父が教えてくれなかつたけどどうか

の外国から、縁の多いこのグラントプレインに移ってきたそうだ。しかしその母さんもその刀を造った翌年に病氣で亡くなつた。

葬式にきていた人々は刀鍛冶としての才能がすば抜けていた母さんを「惜しい人を亡くした」と口々に言つていた。

……母さんの話はあまり好きじゃないんだけど。

話を変えて……銃のグランパレットは父さんが使つていたちょっと古い自動拳銃<sup>オートマチック</sup>で、回転式拳銃とは違ひ発射の反動で自動的に次弾が装填される。

だから俺や父さんみたいな早撃ちには使いやすい代物だ。それに父さんから譲り受けてからちょっと改造して、一度で弾を十六発撃てるようにした。一回の依頼<sup>クエスト</sup>を少ない弾薬でクリアすることができるので楽だ。

「お兄ちゃん、置いていくよー？」

倉庫の入り口 夏帆のいる辺りから俺の妹の声が聞こえる。き

ちんと起きたんだな。……いや、起こしてもらつたのか。

遅刻する気はさらさらないので俺は倉庫から出た。

「おはよう、セラ」

ぎりぎりまで寝ていたのか、まだ眠そうな顔で欠伸をしている。「髪の毛がはねてるぞ」

「え！？ デニ？ デニ？」

慌てて髪の毛を触りだした。その、慌てる姿は……我が妹ながら可愛いな。まるで俺と血が繋がっていないみたいだ。

「セラちゃんをからかわないの」

夏帆に頭を叩かれたので反省。結構痛かった。

セラは夏帆に「はねてないよ」と言われると「むう～……お兄ちゃんのいじわるう」と頬を膨らませて怒つてきた。

気をつける。それは一部のマニアなら瞬殺されそうな言い方だぞ。いや、意外に使えるか？

「妹をエロい目で見るな！」

「うわっ！－－ 危ねえ！」

夏帆の回転蹴りをぎりぎりでかわす。

今のはマジで危なかつた。避けなければ顔面コースだ。

「次エロい目でちゃんと見たら確実に当てるからねー！」

「そんな目で見てねえよー！」

俺も妹に発情する気は全くねえよ。

「二人ともそろそろ出ないと遅刻しちゃうよ？　喧嘩の続きなら後

でしてね」

が歩き出したので俺と夏帆は一旦喧嘩を止め、後ろに続いた。  
普通なら電車かバス通学なのだが、俺とセラは金がないので必然  
的に歩いて行くことになる。

夏帆も最初は文句ばかり言つてたけど、いつも俺達に会わせて歩  
いて通学してくれている。行動とは裏腹に優しいやつなのだ。

## 『実力（アビリティ）』

こつもよつちよつと遅めに出でしまつたけど、この時間なり……  
あつぎり間に合つだらう。

「そういうや夏帆。風の噂で聞いたんだが、Aランクになつたんだつて？ 淫いじやん！」

「え！？ そななんですか？」

「なんとかつてやつも結構あつたけどね。それより。あんたに言わると凄く腹が立つんだけど」

「仕方ないですよ夏帆さん。お兄ちやんは普段はちやらんぱらんでダメダメにみえる唐変木んですけど、依頼とか、ちやんとしないといけないところはきつちりしてますから」

後ろだけ聞くといふこと言つてゐみたいだけ、最初の方は完全に暴言だよね？

まあ、実際そうだしね。

「ほんとなんであんたなんかがSランクであたしがAランクなのよ！ 絶対あんたより真面目に授業を受けてるし、依頼の達成度だって負けてないのに……」

「それは実力がSランク並みつてことだり？ 本當は全然違つよ。でも、なんでだろ？ やつぱりこの実力？」

「殴られたいのかな、あんたは」

「冗談です」

目が本気だ。絶対殴つてくる氣だつたな。

「でも実際夏帆さんとお兄ちゃんつてどっちが強いの？」

「私の方が強いわね」

「夏帆だろうな」

俺と夏帆両方が即効で同時に言つ。

こいつ自信満々に言いやがつて……。

しかし、夏帆に俺が勝てない理由はある。

「な、なんですか？」

「こいつへたれだから」

「断じて違う。勝手に捏造するな」

へたれでも実力は夏帆より上の、しかも銃刀科でSランク並んだぞ。戦闘で負けるはずがない。

さつき言ったように、俺達の通つている高校には結構科目があるんだけど、その中で一番Sランクが少ないのが俺の所属している銃刀科なのだ。

「このバカは相手が仲間だと銃を使わないのよ」

「俺は絶対仲間に銃口を向けないだけだ」

「お兄ちゃんかつこいいね」

そう言わると悪い気はしないな。

「バカなだけよ」

そう言われると心が痛いな。

仲間に銃を使わなくとも、負けることはないのだが、力を押さないと、めんどくさいことになるからな

実を言うと、俺の学校内でのランクは最低ランクのDになつていて、実際、実力は最高ランクのSなのだが、それは夏帆とセラと文武学校の校長しか知らないことだ。

隠しているのはただSランクの依頼クエストが嫌なのと、いちいち絡まるのが嫌といううでもいい理由。

話は戻るが、そのSランクの実力を隠すために、俺は校内ではあまり戦わないようにしている。

もし誰かに見られたりとか、戦つたやつが広めたら、Sランクだとばれてしまう。

だから俺が夏帆に勝てないということだ。

「お兄ちゃんも苦労してるんだね」

「言つほどでもねえけどな」

そう言い、校門を通過して、立ち止まる。

「私はこいつだから。またね、夏帆さん、お兄ちゃん

俺は「おひ」と単調な返事をして再び歩き出した。

高校は中学と同じ敷地にあるが俺達の家からは中学の方が近い。

早足で行かないと遅れるかも。

夏帆も同じことを思ったのか、走り出したので俺もついていくようになつた。しかし残念なことに、それと同時にチャイムが鳴り響く。

「夏帆、先に行つてるぞ！」

これまで後ろをついていくように階段を駆け上がつていた俺なのだが、時間が時間なので夏帆には悪いが先に行かせてもらおう。

今は一階と二階の間にある階段にいるので、二階につくと俺は窓から飛び出した。

このままでは落ちるので、ワイヤーを伸ばし、先に取り付けてあるフックを四階の窓に引っ掛ける。

後は壁を力いっぱい蹴り飛ばし、それと同時にワイヤーを回収すれば四階まで登れる。

左右を眺め、誰もこちらを見ていいか確認して、何事もなかつたかのように教室に入る。ぎりぎり間に合つた。

## 『要請（チャレンジ）』

俺が席につくとチャイムが鳴り終わる。俺が開けておいたドアから送られて夏帆が入ってきた。

「あんた私を置いていったわね！！」

「仕方ないだろ？ 間に合いそうになかったんだ」

「だ、誰のせいで遅れたと思ってるのかな？」

「……俺に整備を頼んだ夏帆のせい？」

「殺してあげる」

そう言い、スカートの中から拳銃ピストル・カルチャを取り出す。これは火力は少々弱いが反動がかなり少なく女子に人気の自動拳銃だ。撃たれると、火力が弱いことを差し引いてもかなり痛いことにかわりはない。

あの乱暴な夏帆でも流石に教室では……って目が本気だ！！

夏帆が対人連銃の引き金を引こうとして、

「おい、笹倉。銃の使用を許可してるのはいえここは教室で、しかも朝のHR中なんだぞ？ 発砲するなら他所でやってくれ」

「う……すいません」

夏帆は周りを見て恥ずかしくなったのか頬を赤らめた。

その後俺をきつく睨んで、対人連銃をホルダーになおし席に戻った。

……危なかった。先生が止めなければ確実に俺を狙つて撃つてたな、あいつ。

佐野先生は夏帆がおとなしく席に座ったのを見てちょっと荒い口調で、

「さてと……じゃあ、朝のHRを始めるよ。まずはこれを見ろ」

黒板にバンツと叩きつけたのは、一枚の紙切れだった。

これは俺の一番嫌いなタイプだ。俺は窓際の一番後ろの席なのでよく見えないが佐野先生が黒板に紙を貼りつけるときは大抵これだ。

「このクラスに討伐要請がきてる。校長の押し印付きでな

佐野先生が白紙の紙をみんなに配り始める。

討伐要請。

これを話すには依頼と要請の違いを知つてもらわなければならぬ  
い。

通常、**依頼**とは放課後に単位が欲しくて個々が自分にあつた依頼を受け、それをこなすと報酬と単位が貰えるという簡単なものだ。

しかし、要請は依頼とはいくつか違う。

**要請**はクラスで選ばれた六人がモンスターや犯罪者を討伐、もしくは逮捕するものである。

依頼と違い、自分がその敵を倒せるランクでなくとも受けれることができるが、その分難しかつたり強かつたりするので病院送り最悪の場合死ぬこともある。

それに校長の押し印ありと云ふことはAランク以上の要請になるのだ。

俺は校内で実力を出したことはないが、先生達は知っている。それにこのクラスにAランク以上は夏帆を含めた三人しかいない。俺は策士としても知られているので、

「多数決の結果、Aランク春日谷陽菜、かすがやひな茅野美奈、かやのみな笹倉夏帆。次にBランク新庄明希、ジェシカ・ストローパ。最後に……Dランク中川そら」

こんな感じにいつも選ばれるんだよなー、俺。要請にDランクで選ばれる戦闘生は全クラスの中で俺ぐらいだろう。それぐらい低ランクのやつは選ばれない。

「また中川か……。Dランクのくせによく選ばれるな、お前」

「そうですね佐野先生。なぜ俺は選ばれるんでしょうね」

「それはこのクラスがバカだからじゃないか? とりあえず、今呼ばれた生徒は今からすぐ準備をして行くように

佐野先生は今呼んだ生徒たちの顔を見て「じゃあ、解散だ」と黒板に貼り付けた紙を投げた。

それを取つたのは『高速の剣獣』という一つ名を持ち今回のメンバーにも選ばれた、刀銃科の茅野美奈さんだ。

赤　いや、緋色に近い髪の毛を揺らしながら紙を取つた彼女は、

二つ名通り高速だった。

大抵Aランク以上には二つ名がつく。夏帆も二つ名をもつたとか言つてた。

それにしても……人間で、しかも女の子に獣は酷いと思う。

「お前も早く行け」

佐野先生に言われ、辺りを見回すと選ばれた生徒はみんななくなっていた。

まずい。出遅れたな。

俺は急いで鞄に入れておいたティスターP82と言う小型拳銃を手にとり、紙に書いてあつた集合場所　校門に向かつた。

## 『編成（ダイバージョン）』

一通り用事を済ませて校門に行くと、既に茅野さんと茅野さんの戦妹弟せんまいていであろう男が待機していた。

戦妹弟。

中高一貫の文武学校では、まだ依頼などを受けられない中学生の育成として、高校生が中学生と一人一組でチームを組むのだ。人数が足りない場合は二人一組になる。俺も三人一組なのだが、一人は今日休みだそうだ。

高校生は男女比率が同じくらい（若干女子が多い）なのでいいのだが、中学生は圧倒的に女子が多いのだ。

なぜ女子が多いかと言うと、男子は姉妹校の終学校ひこうがっこうに推薦入学で入ってしまうから。

なのでほとんどの高校生が中学生の女子と組むことになる。それは別にいいのだが、

「先輩！ 先輩先輩先輩！ ずっと会いたかったんですよ！」

こんな感じになる場合もあるんだよな。誰だ、こんないらん制度作つたやつは。

「先輩！ 私寂しかったんですよ？ 先輩がDランクの依頼クエストしかうけないから、ほとんど一緒にいられないし」

「俺の知ったことじゃない」

先輩先輩うるさい彼女は、俺が戦妹弟を組んでいる中学一年生の梅宮桃うめみやももだ。

桃は依頼ができる中学レベルでBランク。俺より軽く実績はいい。

それにこいつは俺の本気を見たことがある。

俺が高一の頃、Dランクの軽い討伐依頼に行つたとき、たまたま会つてしまつたのだ。中一だった頃の桃に。

そのとき、急いでいた俺は本気でモンスターを討伐した。それを見られてから、いつもいつも「戦妹弟を組んでください！！」と言いい寄られて、仕方なく組んだのだ。

実力的には申し分ないが戦闘以外はべたべたしていくので、全体的にはかなり微妙な子だ。

まあ、慕つてくれるのは嬉しい。

「落ち着け、桃」

未だ先輩先輩言つてくる桃を黙らせていると、残りのメンバーが来て、全員揃つた。

それから軽く自己紹介をして、目的地へと向かつた。  
ちなみに選ばれたメンバーと戦妹弟は、春日谷さんと宮城吹雪さん、茅野さんとその弟の茅野陸君、夏帆と俺の妹のセラ、新庄さんの戦妹弟は休みだそうで、ストロープさんと楸玲奈さん、そして俺と桃。

……このメンバーなら俺は力を使わなくて大丈夫だろ？  
そんな気軽な気持ちで目的地に向かつた。

「遅いぞ、中川そら」

「そうよ。早くきなさいよ」

「茅野さんも夏帆も早すぎるんだ。もうちょっと待ってくれ」

「私のことは茅野、もしくは遙でいいと言つたはずだが？」

「……すいません」

茅野さん……じゃなかつた。茅野……と夏帆のスバルタがかなり効く。

俺がちょっとでも遅くなつたら、遅いだの早く来いだの言つてくる。夏帆だけに言われる分はまだ大丈夫なのだが茅野が加わつて結構辛い。

俺達の会話を聞いていた陽菜が「こ、ここで休憩にしませんか？」

と助かる提案を出してくれた。

ちなみにバス、もしくは電車移動かと思つてたらまさかのランニング。場所がそう遠くないからって理由で。

「ありがとう、陽菜。もうちょっとで死ぬところだった」

「い、いえ、とんでもないです！ 私はただ中川君が疲れてそんだけなー、って思つてやつただけですからー！」

「それが俺からしたらありがたいことなんだよ」

「そそ、そんなもつたいたいお言葉を陽菜にかけていただけるなんて……あああ、ありがとうございます！」

俺が一番仲がよくなつたのは多分この春日谷陽菜だ。彼女は少し控えめな性格だが、先ほどのように俺を気遣つてくれる優しい性格を持つている。そんな性格このメンバーにはなかなかないぞ。

「……中川そら。今悪口的なことを考えなかつたか？」

「気のせいだ」

茅野はかなり勘が鋭いな。

「……そうだな。中川そらが私を裏切るわけがないな」

「……」

裏切りはしないが俺達の仲はそこまでよくないと思つ。ばれなかつたことはラツキーだけど。

「こんなものを拾つたんだけど……姉さんはなにかわかる？」

茅野の弟である陸君が拾つてきたものは……なんだ、これ？ 黒く、筒状になつていて少し熱い。

これはまるで……、

「陸君、ちょっと貸してくれる？」

「あっ、はい。わかりました」

俺は陸君から受け取つた謎の物体を見る。

確かにこれを扱つてもきちんと整備しているもの以外ほとんど気がつかないだろう。

今では俺のように銃ガンの整備士がいるから、自分で整備しているものは限りなく少ない。

もうわかつたとおもうが、これは拳銃の銃口　しかもさつきまで使つていたと見える。

しかし、銃口だけしかない。……なにかに切られているみたいだ。  
この抉られたような切り口は……まさか野獣モンスター！？

「？ どうだ、中川そら」

「これは拳銃の銃口だよ。それにこれの使用者は多分この周辺で襲われている」

「襲われてるの！？ 早く助けないと！－」

夏帆の言つ通り、早くしないと野獣に傷をつけられるかも知れない。  
「みんな一緒に行く方が安全だけビニチームに分けさせてもらひつよい  
いいかな？」

みんなに賛成を得ようとすると、三チームにする意味がわからな  
いのか、なかなか頷いてはくれず首をかしげている。

「ただ俺以外高校生の個々はみんな弱くない。だから分けたとしても負けることはないだろ？ そして分けた方が捜しやすい。これでいいか？」

俺が事細かに説明する。その意味を最初に理解したのは陽菜だつた。

「さ、策士つて呼ばれてる中川君が言つからには意味があると思う  
の。ここでじつとしてるよりはいいんじゃないかな？」

そして一番に　いや、正確には二番に動き出した。

一番の彼女はすでにいなくなっている。『クイック・ユーローン高速の剣獣』の茅野だ。  
多分考える前に行動したんだろう。

「陽菜が茅野の方向に行つたから、後は一チームに分けよ！」

そしてジャンケンをした結果、俺達と新庄さんのチーム、夏帆達とストロープさん達のチームに分かれた。

バランス的には夏帆達に片寄つているが、俺達のチームも俺が本気を出せば負傷者が出る」とはないだろ？ なるべく本気は出したくないけど。

「これを渡しておくから、敵を見つけたら使ってくれ。大きな音がするからすぐにみんなが駆けつけてくれるはずだ」

夏帆に手渡したのは 口ケット花火だ。時間がなくてこれしか持つてこれなかつたのは不覚だけだ。

口ケット花火は使い方しだいでは目眩ましにもなるから結構使える代物だ。

そして「解散」と先生の真似をすると、みんな一斉に動き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3620y/>

---

仮面の騎士（ハイド・ナイト）

2011年11月20日01時16分発行